

可能表現「会」と「能」の使い分けについて

About the Different Use of the Potential Expressions “Hui” and “Neng”

周 国龍*

Guo long ZHOU

要 旨

中国語の可能表現「会」と「能」は場面、会話の流れ、文脈等により使い分けをしなければならぬ。また「会」か「能」が用いられることによっておおよその文脈が推測されうる。「会」と「能」を正しく使い分けるために、文脈と「会」、「能」との関係をしっかり理解する必要がある。一方、日本語の可能表現は何種類かの表現形式があるが、文脈による使い分けとしての用法は見られない。日本語を母語とする中国語学習者の「会」と「能」に関する誤用は「会」、「能」と文脈との関係に関する理解が欠けていることに起因すると考えられる。従って「会」、「能」の意味だけでなく、文脈との関連性によるその使い分けを正確に理解する必要があると思われる。

キーワード： 可能表現 会 能 文脈 使い分け

0. はじめに

可能表現において、中国語にも日本語にもいろいろな表現形式がある。その中で、「会」と「能」はよく使われる中国語の可能表現形式である。中国語において、話し手は場面、会話の流れ、文脈（以下、まとめて文脈とする）に基づき選択した表現形式で意図した意味を表すことができるし、またその文脈も表現形式によって反映される。聞き手もその表現形式から話し手がどのような文脈に基づいて発話し、何の意味を表したいかも推測できる。中国語の可能表現は文脈により、表現形式が選択され、また表現形式から可能表現の含意するところを読み取れるようになっているわけである。一方、日本語の可能表現の表現形式は主に「可能動詞」、「動詞+られる（られる）」「動詞+ことができる」等幾種類があるが、これらの異なる表現形式だけでは

*本学教授 対照言語学 (Contrastive Linguistics)

文脈の違いを見出すことはできず、表現形式自体から表現の意味の違いを区別することは難しい。話し手は聞き手に理解させるためにはどのような文脈に基づいているかを聞き手に理解させる必要があり、聞き手もその文脈を読み取れて初めて話し手の意図した意味を理解することが可能になる。中国語は表現形式の使い分けから文脈を読み取ることが可能であるのに対し、日本語においては文脈への理解が表現の意味を読み取るための前提条件になる。従って、表現を正確に理解するためには中国語の可能表現の表現形式の正確な使い分けが日本語と比べてより重要であると言えよう。

従来、文脈、場面を抜きにして、「会」と「能」は同じ意味に用いられるとされてきた。確かに「会」と「能」は文脈なしでは同じ意味として理解されてもよさそうである。

例1：我会说汉语。 私は中国語を話すことができる。

例2：我能说汉语。 私は中国語を話すことができる。

しかし、実際の言語生活において文脈、場面を無視して会話を進められるかと言えば不可能に近いと言えよう。可能表現において、中国語も日本語も文脈に依存している。中国語は文脈によって異なる表現形式が用いられ、それで、文脈の違いを顕在化させていて、表現の意味を正確に読み取ることが可能になるが、日本語は文脈の違いを表現形式による使い分けという手段がなく、表現形式の意味の違いは主に文脈を頼らなければならない。このような中日の違いが日本語を母語とする中国語学習者（以下学習者とする）の中国語の表現形式による可能表現の意味の使い分けを難しくし、習得の妨げとなり、誤用の一因になっていると考えられる。

本稿は中国語の可能表現の典型的な表現形式の「会」と「能」に焦点を絞って、その使い分けにおいて文脈と表現形式の間にどのような関係があるかを考察し、日本語の可能表現との違いを明らかにし、学習者の「会」と「能」の誤用の原因を究明し、「会」と「能」が表す意味と文脈を関連して理解し習得する重要性を主張する。

1. 「会」、「能」と文脈との関係について

例1：我会说汉语。

例2：我能说汉语。

例1、例2だけみれば、確かに文脈なしで「会」と「能」は置き換えても文法的にも問題がないし、両方とも動作主「我」は「汉语」を話す能力があるという意味があり、日本語に訳せば、どちらも「中国語を話すことができる」となり、一見、文脈なしでは「会」と「能」は同じ意味として理解されてもよさそうである。しかし、このような文脈と切り離して理解することが、郭^(注1)が指摘した例3、例4のような誤用に繋がっているのではないかと考えられる。

例3：彼は英語を話すことはできるが、中国語は話せません。

×他能说英语，不能说汉语。

例4：車の運転を習っていないので、運転できない。

×我没学开车，不能开车。

実際の会話において、必ず何らかの形で文脈がその背後に存在する。「会」と「能」では、基本的な意味の違いが存在するため、文脈が加わってくると必ずしも同じ意味として使えるわけではない。中国語の可能表現において場面と文脈が違えば必ず異なる表現形式が用いられる。それで含意する可能の意味も自ずと違う。言いかえれば、「会」が用いられるか、「能」が用いられるかでその背後にある文脈も違ってくる。学習者の可能表現を習得する段階でこのような違いを正確に理解できなければ、郭が指摘したような誤用が生じるであろう。

願動詞「会」と「能」の違いについて、高橋^(注2)は「“能”が主体の「現在能力」を表すのに対し、“会”は主体の行う出来事が練習の過程の中で、ある一定レベルまでできるようになった「レベル能力」を表す用法」だと述べ、主に「現在能力」の「能」について論述している。筆者は基本的に高橋の「会」を「レベル能力」、「能」を「現在能力」についての分類に賛成する。だが、学習者が中国語の可能表現をよく理解できるようにするためには、高橋の言う「レベル能力」の「会」と「現在能力」の「能」を別々に論ずるのではなく、両者を比較しその具体的な違いを明らかにしなければならない。これによって、初めて学習者も間違えずに使い分けができるかと筆者は考え、まず、「会」と「能」をそれぞれ次のように定義する。

「会」：動作主の行為に関する能力を持続的に有することを意味する。

「能」：動作主の行為に関する能力を有すると推定し、その能力を実行するにあたって動作主の一時的な内的条件、あるいは外的条件を有することが含意される。

以下、どのように意味の違いがあるかを具体的に考察していく。

文脈を考えずに、例1、例2だけ見れば、「会」と「能」は同じような意味に使われてもよさそうである。しかし、可能表現には顕在化されているか否かは別にして必ず何らかの文脈が付いていると考えられる。例1、例2は実際の会話の場面で文脈を考慮に入れば必ずしも置き換えて使えるとは限らない。即ち文脈を抜きにしては正確に理解することはできない。例1、例2については次のような例を見てから再度考えてみよう。

次のような例も文脈を考慮しなければ同じく泳ぐ能力の有無を聞くことが可能であろう。

例5：甲：你会游泳吗？ あなたは泳ぐことができますか。

乙：我会游泳。 私は泳ぐことができます。

例6：甲：你能游泳吗？ あなたは泳ぐことができますか。

乙：我能游泳。 私は泳ぐことができます。

泳ぐ技能が身につけていれば、どちらも正しい答えになり、日本語は同じ訳にしても差し支えないであろう。それは両方とも動作主の「能力」を聞いている点において共通しているからで

ある。しかし、仮に動作主の泳ぐ能力を有することを知っていれば、能力の有無を聞く必要性はなくなり、例7のように「会」を用いて聞くことはないであろう。

×例7：你会游泳吗？

もし、能力以外のこと、即ち動作主の内的条件か外的条件について聞こうとするなら、「能」を用いなければならない。例えば、体の調子が悪そうな人に、

例8：(今天) 你能游泳吗？(今日は) 泳ぐことができますか。(内的条件)

或いは、荒れた天候の時に、

例9：(在这样的天气情况下) 你能游泳吗？(こんな天候で) 泳げますか。(外的条件)

「能」を用いてその行為実行における内的条件、あるいは外的条件に関することを聞くことになるわけである。また、

例10：你能游100米吗？

×例11：你会游100米吗？

例10は能力の有無への質問ではなく、寧ろ泳ぐ能力があることを前提に、ここでは「100米」といった条件が付いた場合においてその実行能力の有無を聞いているから、「会」は使えず、「能」しか用いられないわけである。

このように、泳ぐ能力を有することを知っている相手にはあらためて「会」を用いてその「レベル能力」について聞く必要はない。一方、行為実行にあたってその場において何らかの制限条件下での行為実行の能力の有無に関する場合、「能」が使われることになる。

泳ぐことは生まれてから自然的に身に付く能力ではなく、後天的に習得することであるから、泳ぐ能力を知らなければ、習得したかどうかを相手に聞くこともできるし、習得したと想定して、その場の何らかの条件下で泳ぐ能力の有無を聞くこともできる。だから、顕在的な文脈情報がなければ「会」も「能」も用いられるが、文脈の制限を受ける場合は「能」しか使えなくなる。

泳ぐことは動作主の習得したことによって得た能力と言えようが、次の例のような生まれつき自然に習得できる能力の場合は状況が違ってくる。例えば、1才前後で歩けるころの子供の親に、

例12 甲：他会走路吗？ 彼は歩くことができますか。

乙：他会走路。 彼は歩くことができます。

例13 甲：他能走路吗？ 彼は歩くことができますか。

乙：他能走路。 彼は歩くことができます。

このような1才前後の子供には、「会」も「能」も用いることができるだろう。何故なら、1才の子供には何らかの制限条件を聞く可能性はまだ考えられる年齢ではなく、その歩行能力が既に身に付いたか否かの質問になるだけだと問答双方とも常識的に認識しているからである。

つまり会話の双方が1才の子供という文脈から考え、制限条件が入る余地がほとんどなく、誤解が起る可能性はないと言えよう。従って、どちらが用いられても差し支えないわけである。しかし、5才の子供になれば、言うまでもなく常識的に考えれば既に歩行能力が身に付いているはずだから、「会」を用いてその能力の有無を聞くのは常識はずれのような聞き方になると思われるであろう。つまりまだ歩行能力は身につけていない可能性があるという意味を含めて聞くことになるから、

×例 14：他会走路吗？

で聞くとその子供の歩行能力を疑問視していると理解されてしまうであろうから例 14 は普通は用いられない。一方、基本的に制限条件について用いられる表現である「能」で聞く場合、

例 15：他能走路吗？

は（怪我）といった内的制限条件、（険しい山道等）といった外的制限条件において「歩く」行為を実行する能力の有無に関する質問になるから、普通に用いられるであろう。

×例 16：他会吃饭吗？

？例 17：他能吃饭吗？

例 16 の「会」、例 17 の「能」は大人への質問なら誰でも食べる能力は持っているはずだから聞くまでもない。従って例 16 の「会」も例 17 の「能」も食べる能力の有無についての質問には用いられないであろう。しかし、何らかの制限条件が意識されながら質問する場合

例 18：你能吃饭吗？

は用いられることになる。会話の双方は協調原理に基づき、当然「食べる」能力の有無ではない。「食べる」行為に関する内的条件か外的条件の有無についての質問と理解されるであろう。内的条件ならば、例えば病気を患った場合なら、食事制限の有無に関することになり、外的条件ならば、仕事を取り込み中などで、時間的な余裕の有無に関する会話になる。

このように、常識的に「レベル能力」を既に有する者について、「会」を用いる余地が考えられにくい。しかし、「現在能力」なら、その場その時の制限条件が考えられうるので、「能」は用いられるわけである。だから、例 18 はレベル能力の有無を聞くと思われる可能性は排除されることになるので、おのずと制限条件の有無に関する話だと推測されるのである。

以上の例から見てわかるように、文脈を一切考慮に入れなければ「会」も「能」も用いられてよさそうであるが、実際の会話では必ず何らかの形で文脈が存在し、その文脈に基づく会話になれば、「会」か「能」かのどちらかしか用いられないことになるわけである。

基本的にその能力の有無に関しては「会」が用いられるが、能力を有したと認識し、その場その時において、能力実行の可能の有無については「能」が用いられる。このような文脈を認識してこそ、初めて可能表現を正しく運用できるのである。

以上の考察でわかるように、例 1 の「我会说汉语」、例 2 の「我能说汉语」は文脈を考慮に入

れなければ確かに文法的に問題なく使えるように思われる。しかし、「汉语」の母語話者と知っていれば「你会说汉语吗?」はもう使えないであろうし、母語話者であれば「我会说汉语」も言わないであろう。また、「汉语」の母語話者と知らずに聞いたら、多くの場合、返った返事は「我是中国人」、言わずとも「当然会说汉语。」となるであろう。これも文脈としてしっかり認識し、明らかに能力があるとわかれば、「会」は用いられないのである。また、次のような場面なら、例えば、日本語学習の授業中、「说汉语」が禁止された場面において、「我能说汉语吗?」と聞くことは可能であろうし、「(现在) 你不能说汉语」、或いは「(现在) 我不能说汉语」とも使えることになる。このように見てくると、例1の「我会说汉语」、例2の「我能说汉语」はいかなる文脈も想定しない時には文法的で、同じく「中国語ができる」という意味に訳せるように思える。しかし、実際の会話に使われた場合においてはいずれも何らかの文脈を認識し「会」と「能」を使い分けしなければならない。このように、文脈のことも考慮に入れば、「会」と「能」は同じような意味として使えるものではないことが分かる。

一般的に言えば、何らかの能力は一旦身に付いたら、その能力はそう簡単に失うことはなく、またその能力の有無が分かれば改めて聞く必要もない。だから「会」の使い方は「能」ほど多用されないわけである。一方、身に付いた能力を実際に実行しようとする時に、色々な制限条件に遭遇する可能性が高く、その行為実行にあたって、実行可能かどうかを聞く必要性も高くなるであろう。だから、「能」は「会」より多用されるわけである。しかし、以上の考察でわかるように、いずれにしても、「会」と「能」は文法的に説明する場合において同じように使えるとしても実際の会話においては必ず何らかの形で文脈が表現の背後に付くはずである。文脈の全くない会話は成り立つとは考えられにくい。従って、可能表現「会」と「能」についてはその意味、使い方とともに文脈との関連性への理解の重要性も学習者が理解しなければならないわけである。

2. 日本語の可能表現の形式と文脈との関係について

日本語はハイコンテキスト言語と言われている。コンテキストの共有性が高い文化なので、伝える努力やスキルがなくても、お互いに相手の意図を察しあうことで表現を理解することが可能のようである。可能表現においても、異なる表現形式は幾種類かあるが、それらを持って違う文脈を区別する手段は持ち合わせていない。それにもかかわらず、表現に対する互いの理解に支障をきたす可能性は低い。なぜなら、表現形式から情報を得るよりも文脈に頼ってその表現の意味を読み取ろうとする傾向にあるからである。次の例を見てみよう。

例19: A女:「いいお店を見つけたんだけど、フランス料理を食べにいかない?」^(注3)

B男:「いいね。久しぶりにおいしいワインが①飲めるかな」

A女：「もちろん。Bさんはかなり②飲めるんだったわね」

(レストランで)

給仕：「本日はサービスといたしまして、お一人様1杯ずつこちらのラインワインが無料で③召し上がれます」(それぞれのグラスに注ぐ)

B男：「うーん、このワインは④飲める。かなり、いいものだね」

給仕：「はい、こちらは日本ではなかなか⑤お飲みになれないと聞いております」

A女：「私はワインはちょっと苦手だから…キールなら⑥飲めるかな」

B男：「ちょっと待って。このワイン、本当に素晴らしいよ。きっと⑦飲めるよ」

A女：「そう？あ、おいしい。……ワインがこんなにおいしく⑧飲めたの、初めてよ」

例中の「召し上がれます、お飲みになれない」の敬語の表現を普通の表現にすれば同じく「飲める」となる。しかし、同じ「飲める」という可能の表現形式であっても「①はレストランという場所的条件の可能、②は主体の酒に強いという属性的可能、③ではレストランのサービスという環境的可能、④は客体であるワインの質の価値的可能、⑤は本場に限られるという場所的条件的可能、⑥は客体であるキールの質と主体の属性的可能、⑦⑧は客体的であるワインの質的価値と主体の属性的可能と分類することができる」^(注4)としている。

このように、日本語は異なる文脈であるにもかかわらず、同じ可能表現の形式を用いて、それぞれ違う意味を有する表現を表すことができるのである。このような現象から推測すれば、可能表現において、日本語話者は文脈を敏感に読み取れるであろうが、文脈と表現形式の関連性、表現形式の選択にはそれほど気にする必要はないように思われる。

3. 中日の対照

以上の考察で、可能表現における中国語と日本語との表現の方法に違いが存在していることが分かった。可能表現が用いられる場合、その文脈は中国語も日本語も考慮されるという点において双方は共通している。しかし、中国語は文脈によって「会」と「能」は使い分けをしなければならないし、また「会」が用いられるか、「能」が使われるかで場面と文脈が異なることが容易に推測することが可能である。一方、日本語の可能表現は何種類かの表現形式を有するが、異なる文脈による表現形式の選択をする必要はほとんどなく、同じ表現形式が用いられるのである。そのため、表そうとする意味を表現形式からではなく、文脈に頼らなければ区別することが難しい。日本語と中国語のこのような違いが学習者の「会」と「能」といった中国語の可能表現の習得の妨げの一因になっていると考えられる。次のような誤用が見られるのもこれに起因すると思われる。

×例 20：今天我感冒了，不会游泳。 今日風邪を引いてしまったので、泳げません。

例 21：我没有学过游泳，不会游泳。 水泳を習ったことがないので、泳げません。

「不会游泳」の部分だけを見れば、日本語に訳すと、どちらも「泳げません」となるであろう。その前の理由、つまり文脈があれば、「泳げません」はその能力がないことなのか、何らかの制限条件によるかは明らかになる。この点において両言語は同じである。しかし、中国語はその違いを「会」と「能」の使い分けが表現に反映させなければならないが、日本語はその違いを反映する手段がないので、同じような表現が用いられることになるわけである。学習者は文脈をよく理解できるにもかかわらず、「会」と「能」の使い分け、そしてその使い分けと文脈との関連性の重要性がよく理解できなければ、誤用を犯してしまう可能性があると考えられる。

×例 3：他能说英语，不能说汉语。

この表現は「英語はできるが、中国語はできない」と対照的に言っているので、英語と中国語の能力の有無についての文脈だと理解されれば、「能」ではなく、「会」にしなければならない。

例 22：我不会开车。

例 23：我不能开车。

例 22 では、運転する能力は常識的に自動車学校で習って身に付くことだから、「不会」は運転する能力は身につけていない、つまりは習ったことはないという文脈的な意味が読み取れなければならない。従って、表現に「我没学过开车」（免許を取っていない）等の文脈の意味が含まれることになるだろうし、もし、例 23 「不能」なら、運転する能力はあるが、何かの事情で運転することができないという意味に読み取れる。例えば、「我没带驾驶证」（今免許証を持っていない）、あるいは「我喝酒了」（酒を飲んだ）等の文脈が裏にあることが察知されるべきである。従って、文脈を省略して、「我不会开车」だけを行った場合は運転する能力がないことを表すことになり、「我不能开车」は運転する能力はあるが、何らかの事情があるといった文脈の意味を含有することになるわけである。しかし、日本語はどちらも同じく「私は運転できません」になり、中国語のような「会」と「能」で区別する方法はなく、文脈への理解がなければ理解に困る場合が生じるであろう。

このように、日本語の可能表現には表現形式による意味を区別する機能がほとんどないわけである。学習者がその文脈を読み取れても、文脈と関連して「会」と「能」の意味の違いによる使い分けができなければ、「会」或いは「能」を使うべきところを「能」或いは「会」を使えば、誤用になるし、聞き手の理解を誤らせることになるわけである。

このように見てきて、学習者の誤用は主に、

1. 「会」と「能」の意味の違いがあること
2. 「会」と「能」の使い分けにおいて文脈との関連が重要な要素であること
3. 違う文脈により「会」と「能」の使い分けが必要であること

等への理解、認識の不足によるものと考えられる。その原因は習得する段階に「会」と「能」についての文脈との関連性の説明不足、あるいは理解不足に起因すると考えられる。

4. 終わりに

可能表現で、中国語においても日本語においても文脈が非常に大事な要素になっていることは前述したとおりである。中国語と日本語との違いは次のような点にある。中国語は文脈の違いによって、「会」と「能」の使い分けが必要になる。言い換えれば、可能表現において、「会」と「能」の使い分けで文脈の違いは大よそ推測できる。この意味で、「会」と「能」の使い分けは文脈と密接な関連性があることも重視しなければならない。一方、日本語には可能を表現する表現形式は何種類かあるが、それは基本的に同じように使え、文脈による使い分けは見られない。表現形式からその意味の違いを区別することが難しく、主として文脈を頼らざるをえないわけである。日本語では文脈によって表現形式を使い分ける手段が乏しいということは中国語の可能表現の「会」と「能」の使い分けへの正確な理解と使用を難しくし、「会」と「能」の誤用の原因になっていると考えられる。従って、「会」と「能」を正しく使い分けをするためには、「会」と「能」の意味、そしてその文脈を正確に理解しなければならないわけである。

本稿は動作主の能力に関する「会」、文脈の制限の有無に関する「能」について考えてきたが、推測、判断等の意味を有する「会」と「能」等については触れていない。これらを今後の研究課題としたい。

注：

注1：郭 p. 33

注2：高橋 p. 140

注3：坂田 p. 100

注4：坂田 p. 101

参考文献：

- 郭 春貴 2002 『誤用から学ぶ中国語』 白帝社
- 坂田雪子 編著 2003 『日本語運用文法——文法は表現する』 凡人社
- 周 国龍 2012 「何故日本語は曖昧だと思われるのか (4) —可能表現に関する日中対照の視点から—」 『鈴鹿国際大学紀要』 No. 19

- 高橋弥守彦 2008 「可能表現に用いる能願動詞“能”」『日本語と中国語の可能表現』 日中対照言語学会 白帝社
- 魯 曉琨 2008 「以“能”为纽带的现代汉语可能表达系统」『日本語と中国語の可能表現』 日中対照言語学会 白帝社